コンサートホールで気がついたこと

梅田 富雄（化工会）

先日、あるコンサートでの**内なる出来事**をお話しします。いつもはコンサートで演奏される音楽に熱心に聴き入ることが当然のこととして、その場で楽しむことで満足していますが、なんとなく、熱中できないようなパーフォーマンスの場合、漠然と別のことに思い巡らし、上の空に近い状態で聞いていることがあます。今回も同様のことが生じ、別のこととして、プロジェクトマネジメントのテキストによく取り上げられている、オーケストラの指揮者とプロジェクトマネジャーのアナロジーについて考えていました。

プロジェクトの遂行に関係する諸機能を、プロジェクトに割り当てられた要員のスキルとマインドのもとで、プロジェクトに課せられた種々の制約条件を満たす最適な妥協解を見つけて実行する責務を負っているプロジェクトマネジャーは、各パートの要請を受けて、QCD(Quality, Cost, Delivery)つまり、品質、コスト、納期を念頭に置いて当面の課題を解決していくことになりますが、現在の状況に対応して、これらのどれかに重点的に処理することが繰り返されます。各パートが全体の状況を理解し、自律的にマネジャーの行動に同意する範囲内で特に問題なくプロジェクトが遂行されていくと考えられます。その際、あるパートがマネジャーの決定に同意でなければ両者間で話し合い折衝が行われ、妥協解が求められ、当初の決定が変更されて実行に移されるわけです。したがってプロジェクトマネジャーは関係者の要請を踏まえて協調を図ることが重要な責務になると考えられます。

このことのアナロジーとして演奏会で指揮者がオーケストラをマネジメントを行うことを考えると、リハーサルにおいて夫々のパートの要請を聞いて全体の調和を図る妥協解を求めながら指揮者自身の思いを乗せて最良のパーフォーマンスを出すように努力し、練習を済ませて本番に臨むことになると思われます。演奏に参加するメンバーのスキルやマインドは与件として受け入れ、夫々のメンバーが最良のパーフォーマンスを出せるような環境づくりを行うことが求められると思います。ダイナミックに遂行される本番の演奏においては、やり直しはできないことは、状況によっては役割分担を変更できるプロジェクトとは異なり、瞬時に成果に関係するという時間的な制約でプロジェクトの運営とは大きく異なると考えることができます。

コンサートでの演奏活動とプロジェクト遂行活動の見かけの類似性からは見えてこない事柄は、それぞれの活動の場に焦点を置いて深く観察しなければならないことが理解されることと思います。たまたまこのようなことに思い至った背景には、最近の研究内容に関係して、Strategy As Practice (戦略は実践に従う)及びオートポイエーシス(自己創成)におけるコミュニケーションについて研究していることが挙げられます。実践の現場状況を反映しながら、プロジェクトマネジャーや指揮者が描いている戦略を遂行することと関係しているとの思いを強くしており、関係者間のコミュニケーションを通じて、その場における自らの発言を相互に受け止めベストパーフォーマンスを追及していく場面を思い浮かべたりしています。こんなことから、本稿をまとめてみました。(2017:6:10)